

論文

19 世紀中葉イギリスにおける夫の出産への 立会いのポリティクス ——分娩室での男性産科医と夫の対立

浮 岳 靖 子

19 世紀イギリスでは鉗子 (forceps) などの器具や薬品の使用が進むなど、いわゆる「出産の医療化」が進んだ。16 世紀末の男性産婆 (man-midwife) の登場以来、徐々に進んだ男性の出産への関与は、19 世紀になり産科医 (obstetrician) が団結して職業として社会的地位を確立すると、さらに顕著になった。その動きは 1826 年に *OED* にて ‘obstetrician’ の初出が認められ、1820 年代より徐々にイギリス各地で産科学会 (Obstetrical Society) が設立されたことにも表れている。¹ 一般に、鉗子などの器具の使用は男性産科医に限られており、当時第一線で活躍する産科医は自分自身でそれらの器具を改良し、産科学会などで発表し、情報交換をしながら自らの専門家としての地位を確立していった。このようにそれまで産婆を中心とした女性グループによって司られていた出産の慣習に、19 世紀になると次第に男性が介在するようになり、彼らは、安全性と効率を盾にそれまで主流であった産婆 (midwife) に対する優位性を示そうとし、産婆に対して登録制や試験を導入するなどした。²

このようなジェンダーを軸とした議論は、概して、医療を「行う側」の視点を重視し、「患者の側からの視点」を扱ってこなかった。もちろん資料の性質上、出産を控えた、あるいは終えた女性は体力の消耗が著しいため、彼女たち自身による記録は希少だ。1975 年に Patricia Branca は出産を含む女性の研究において「この主題における最も重要な観点、つまり母親自身の視点が見落とされつつきている」(74) と批判したが、数十年経った今でもその状況にあまり変わりはない。そして、わが子の誕生という、出産のイベントにおける関係者、つまり夫たちの存在もまた、まだ十分に分析されてい

い。³

もちろん、19世紀イギリスにおいてすべての夫が妻の出産に関与したわけではない。階級差による家の構造の違いもある。しかし、最近の歴史研究では、はっきりとした根拠がないものの、1830年代に夫による立会い出産がより普及したという点において合意している。⁴ 関わり合いの度合いは個々のケースによるが、19世紀半ばにおいて、夫が出産の場において顕在化し始めたことは確かだといえる。では、その理由は何なのか。

John Tosh は、この夫の立会い出産のケースの増加を「夫が父権を強化し、子供の産み手としての母の特権的立場との釣り合いをとろうとした結果」(81-2)とみている。しかし、先に述べたように出産をめぐる状況が著しく変化した19世紀イギリスで、産科において起こった様々な変化を考慮に入れると、このToshの分析は十分でないとわざるを得ない。つまり、2つの点——男性産科医が増加したことによる出産の状況の変化、そして医学の新技术、特にクロロフォルムによる出産への影響——を無視するわけにはいかない。男性産科医の出産への介入は、出産の場における「男性産科医と夫の対立」を浮き彫りにした。それまでの慣習のように助産婦ではなく、男性産科医が出産という私的な空間へ入り込むことが、出産に関する夫婦家族の関係に影響を与えたのは容易に想像できる。加えて、19世紀における大きな変革、男性産科医が使用したクロロフォルムなどの麻酔の使用が、医師と患者である妊婦の関係、さらには妊婦とその夫の関係に変化を与えたことも考慮すべきである。1847年にエディンバラの産科医 Dr. James Young Simpson によって初めて成功したクロロフォルムによる無痛分娩は、様々な議論を経つつも、やがて普及し、多くの女性やその家族はその使用を渴望した。しかし、出産を控えた妊婦は実際に、どのようにクロロフォルムによる無痛分娩の方法とその情報に接触することが可能だったのか、という分析も必要になってくる。

本論文では、主に出産に立ち会った夫や当事者である妊婦、また医師による記述をもとに1830年代より増えた夫による立会い出産の意味を明らかにし、さらに、当時の出産に関する社会的状況、クロロフォルムに代表される医学の進歩が、この問題にどのような影響を与えていったのかについて論じていく。

1. 夫による立会い出産の歴史

イギリス 18 ～ 19 世紀の貴族の結婚と出産の研究において Judith Lewis は、18 世紀において夫たちは出産に「悪名高いほど無関与 (notoriously uninvolved)」(188) だったと論じている。しかしながら、19 世紀において、出産は日々の家族の生活の中でありふれた光景であったはずである。結婚した夫婦間の子供の数の算出方法については常に議論が続いているが、ある 1870 年の調査によると、中流、上流階級の女性は死産を含み、平均 5.3 人の子供をもうけた。⁵ 労働者階級においてはこの数字はもっと高くなるだろう。19 世紀の多くの女性は生涯において何度もの出産での苦難を経験した。1840 年から 1857 年にかけて 9 人を出産した Queen Victoria はかつて、出産という重荷に耐えることへの気持ちを後にプルシア王女となった年長の娘 Victoria に手紙で書いたことがある。

‘if you have hereafter ... aches — and sufferings and miseries and plagues — which you must struggle against — and enjoyments etc. to give up — constant precautions to take, you will feel the yoke of married woman! ... I had 9 times for 8 months to bear with those above-named enemies and real misery (besides many duties)...’ (Fulford 78)

このように Queen Victoria は度重なる妊娠と出産の負担に辟易していた。ある時友人である Duchess of Sutherland から Simpson の書いた無痛分娩を広めるためのパンフレットを入手すると、自ら進んでクロロフォルムの使用を希望し、当時ロンドンでの麻酔医として権威になりつつあった Dr. John Snow の立会いで、1853 年と 1858 年に 2 度の無痛分娩を経験した。この時、夫、Prince Albert も立ち会っていた。⁶

妻の出産に実際のところ夫は関与せずにはいられたのだろうか。家の構造からみても、それはほぼ不可能であったと思われる。19 世紀イギリスにおいては、病院での感染症を防ぐために、保護の必要な貧困層を除いては、ほとんどの出産は病院ではなく自宅で行われていた。寝室、あるいは家の中の他のスペースが出産の時期になると分娩のための部屋として使われたのだ。あるアドバイザーは、分娩室となる部屋は、出産する妊婦だけでなく、出産時に

助けとなる女性の友人たちにとっても居心地のいいように居間の雰囲気を持たせるのがよいと論じた。⁷ このように家の中で頻繁に起こる出産というイベントにおいて、夫を始めとする家族が出産の際の母の苦痛の叫びを聞かざるを得なかったということは容易に想像できる。当時、痛み の性質と役割 について の見解の相違から、分娩時に声を出して叫ぶことを良しとするかどうかは医師によって意見が分かれた。例えば、母親向けのアドバイス本を書いて人気のあった Dr. Allbut は、声を上げるべきでないと断じたのに対し、Dr. Locock はむしろ声を出して叫ぶよう促した。⁸

夫は妻の出産に際して手助けできることは少ないが、「精神的な支え」として妻に有難がられることはあった。Maria Cust (1833–64) は夫の元気づけに感謝したひとりだ。彼女と夫 Robert は、ともに中流階級の家族に生まれ、Maria が 23 歳の 1856 年に結婚した。Robert は弁護士となり生活の水準はそれなりに高くなっていった。結婚した際、Maria には 2 人の姉妹と未亡人の母がいた。1857 年 10 月 18 日、Maria は日記に彼女の初めての出産について記している。

October 18, Sunday. 8.30 A.M.: A slight pain caused a note by fly to be dispatched to Dr Bullar. The pains increased in frequency and severity. Dr Bullar arrived at 11.40 & at 12.20 our little one was brought into the world & cried out loud. There being no nurse, Horton & Ann (housemaid) had to wash and dress the infant, who was pronounced to be a fine child, but sometime afterwards was considered very small indeed. She was born with dark hair & beautiful nails on her hands and feet. Dear Robert was allowed by Dr B to be of the greatest comfort to me in supporting me during the last pains. I was ordered to be kept very quiet but nevertheless saw my sister in the evening. The baby was brought to me several times in the day and night but not allowed to remain. At the time of the birth there were present Dr B, Robert, Mamma, Horton and Caroline. (Cust n.pag.)

Maria の日記は、女性自身の手によって書かれた、当時の出産の様子を垣間見ることのできる数少ない貴重な資料だ。19 世紀の出産によくあるように、

医師は子どもが生まれるほんの直前まで到着しなかった。⁹ このような場合、夫の存在が大いなる支えになったことは言うまでもない。Maria と Robert の信仰心の強いバックグラウンドによるものだろうが、彼女の出産において麻酔を使った記録はない。

もう 1 つ、出産の様子を伝える資料が残っている。John Russell 夫人の日記である。旧姓 Frances Anna Maria Elliot は、1851 年に 2 代目 Earl of Minto の 2 番目の娘として生まれた。John Russell の熱烈なプロポーズで結婚に至った時、John は 48 歳、Maria は 25 歳だった。Russell 夫人として彼女は 1842 年から 1853 年にかけて 4 人を出産。1847 年には Queen Victoria によって、ロンドン郊外リッチモンド・パーク内に Pembroke Lodge を贈られたが、しばしば体調を崩し、故郷であるエディンバラに戻る生活をしていた。2 度目の出産の 2 か月後にあたる 1848 年 5 月 16 日、彼女は日記にこう記している。

With a thankful heart I begin my diary again. Another child has been added to our blessings — another dear little boy. John was with me. Oh! his happiness when all was safely over. This child has done much already to restore his health and strength. Summer weather and the success of all his political measures for the last anxious months have also done much.
(MacCarthy and Russell 100)

産後の疲れもあつてか記述自体は短いものの、そこからは夫婦の親密さと愛情がうかがえる。「John は一緒にいてくれた “John was with me”」とあるように、夫 John は妻の出産に立ち会っている。

前述の Maria Cust と Lady Russell の違いの 1 つは、クロロフォルムの使用の可能性にある。1848 年 3 月、Lady Russell は、その数か月前にクロロフォルムを用いた無痛分娩に成功したことで知られていた Simpson より手紙を受け取っている。

Edinburgh, March 1848

I heard from two or three different sources that your Ladyship was to be blessed by an addition to your family...I once made a pledge, that I would

gladly leave all to watch and guard over your safety if you desired me. I have not forgotten the pledge, and am ready to redeem it — but not for fee or recompense, only for the love and pleasure of being near you at a time I could possibly show my gratitude by watching over your valued health and life.... With almost all my medical brethren here I use chloroform in all cases. None of us, I believe, could now feel justified in not relieving pain, when God has bestowed upon us the means of relieving it. (MacCarthy and Russell 99–100)

Simpson は同様の手紙を多くの上流階級の女性に送っていた。¹⁰ それは、女性の支持と関心を集めることが、産科医として名を広め、成功していくためには最も迅速で効率のいい方法であると彼自身が知っていたからだ。当時、出産を成功させることは、その後も代々その家に主治医として関わっていく可能性を広げる点で非常に大きな意味を持っていたのだ。Lady Russell の日記には麻酔使用についての記述はないが、1850 年に夫 John Russell は Simpson に妻の診察を依頼している。このことから、Simpson と Russell 夫妻の医者と患者としての関係は継続していたと考えられる。¹¹ Simpson の送った手紙の事例は、クロロフォルムを用いた無痛分娩という新しい医療技術の出現を機に、新たな情報網が構築されつつあったことを示している。それまで出産の慣習は身近な女性を中心としたコミュニティ内部で保持され、あるいは母から娘へと受け継がれていったが、この新しい情報網によって産科医と出産する女性が直接連絡を取り合う機会が増えたといえるだろう。また、それまで産科医と連絡を取り合っていた妻がいざ陣痛が始まると、夫がその代わりとなって産科医と連絡を取ることは十分考えられ、産科医と妊婦という関係に間接的に夫も関与せざるを得なくなるという図式を端的に表しているといえるだろう。

2. 分娩室における対立

出産時に夫の存在が妻に感謝されるものであったとしても、彼らは必ずしも男性産科医によって歓迎される存在ではなかった。19 世紀においては多くの男性産科医が出産を控えた女性向けにアドバイス本を書いたが、その中で

「誰が出産に立ち会うべきか」が言及されていた。「医者と、1 人か 2 人のできれば未婚でない女性の友人」というのが大多数の意見だった。¹² 1840 年代に入り、医学雑誌 *Lancet* では夫の立会い出産をめぐる議論が交わされていた。きっかけは 1841 年に編集者に宛てて送られた 1 通の手紙だった。¹³ 自ら「田舎医師 (Country Doctor)」と名乗った医師は妻の出産に立ち会う夫たちを非難しており、「4 人もの男性医師に囲まれていたうえ、夫 Prince Albert も立ち会った Queen Victoria」の例を挙げ、「看護婦やプロフェッショナルな男性がつかっているというのに、夫が出産に立ち会うというのは適切といえるだろうか」と疑問を投げかけた。この「田舎医師」は「最近、2 件の出産で夫の出産立会いに苛立たされた」と述べ、1 つのケースでは「夫が不適切にも何度も出入りをする」ので、夫に「深刻な顔をし、あなたはいらっしゃらなくていい旨お伝えした」と記している。これに対し夫は説得に応じず、ついていた看護婦は「奥様が以前、ロンドンでドクター何某かに見ていただいた時には、最初から最後まで旦那様がそばについていらっしゃっても何も言われなかったそうですよ」と説明した。この「田舎医師」は他にも同様の「当惑を隠せない」ケースを経験し、「これは ファッショナブルなロンドン流の産科の方法なのだろう」と結んだ。この医師の詳細は明かされていないが、少なくとも出産時の夫の立会いを「ロンドン流」とするような了解が男性医師の中で出来上がりつつあった可能性を示唆している。*Lancet* への投稿で別の医師は「14 年間ずっと医療に携わってきて、夫が立ち会ったのは 3 回か 4 回だけ」と記している。¹⁴ 「田舎医師」の手紙が掲載された翌週より続いた夫の出産への立会いに関する議論には、もちろん夫の立場を擁護するものや、「夫婦間の問題」として一蹴するものもみられた。しかし、この一連の議論自体が、1830 年あたりからの出産の形態の変化に伴い、人々の中に出産へ立ち会う夫への意識の相違が生まれ始めていた事例と捉えることができるだろう。というのも、この 19 世紀前半は、先に述べたように、男性産科医が自分たちの職業としての社会的地位を強化していく段階にあり、その中で浮上した上記の夫の出産への立会いの是非をめぐる議論は、出産の場での覇権争いともいえる衝突を浮き彫りにしているといえるだろう。

1852 年に描かれた “Morality of Modern Medicine-Monger, Dedicated to the Husband, Fathers, and Brothers, of England, and Also to the Societies of the Prevention

of Vice”なる風刺画はこの男性産科医と夫の衝突をよりはっきりと描き出した例である。“The Family M.D.”，“The Obscene M.D.”，“The Obstetric M.D., Who Makes the Disease of Women His Particular Study”，“The Mesmeric M.D.”と4つのパートから成る絵は、それぞれ男性医師の不道德な側面を描き、それらは女性の夫、父親、兄に向けて警告を発するという形で描かれている。¹⁵ その中でも“The Obstetric M.D.”[図版参照]は産科医と夫の間の緊張関係を最も如実に描き出している例といえるだろう。

椅子に足を組んでふてぶてしく腰掛けた産科医は、顔をそむけて恥じらいの表情を見せる女性に話しかけている。

女性「ああ、夫はこのことについて何というかしら」

医師「何だって、彼が何を言えるっていうんです？私は専門家じゃないのですか？私は病院で講義をし、専門の分野についての本を書いていますよね？フランスの諺をご存じでしょう、『大変なのは最初の一步だけ』ってね。検査をさせてくれさえすればいいんですよ。そしてあなたはそれについて何も考えなくていいんですよ。」

女性「ええ、受け入れるべきなんでしょうね。それはものすごくお下品に見えるのですが。でもどうか夫には何も言わないで下さい。」

(中略)

医師「あなたは今朝はなんと美しいんでしょう。マダム、私がお婦人の病気を専門にしているのはご存じでしょう。私はスベキュラムと呼ばれる新しい器具を発明したんですよ。それを使えば、あなたのどこが悪いのかすぐにわかります。ですから、さあ、ソファに横になってください。診察いたします。」



[図版] “The Obstetric M.D., Who Makes the Disease of Women His Particular Study.” (1852) “Morality of Modern Medicine-Mongers” (1852) より抜粋

[On the Left]

Lady.— Oh, what would my husband say to this, dear Doctor.

Doctor. — Say! why, what can he say? am I not a professional man? have I not lectured at the hospitals, and written a book on this branch of my profession? You know the old French proverb, ‘Ce n’est que le premier pas qui coûte’ . [It’s the first step that counts]. Only let me have one examination, and you will not think anything about it. Lady. — Well, I suppose I must submit, though I must say it looks indelicate; but don’t say anything to my husband about it. According to Mr Morrison’ s System of Medicine, I understand that such examinations are strongly condemned, as quite unnecessary, as much as every person should be his own physician.

[On the Right]

How pretty you look, this morning. You know, my dear madam, that I have made the diseases of your sex my particular study. I have invented a new instrument, which I call a speculum, by which I can at once see what is the matter with you; therefore, if you lie on the sofa, I will proceed to examine you.

医師がここで言及している「スペキュラム」は、通常長い筒状の形をした子宮の内診をするための器具で、おそらく医師の横にあるテーブルの上に描かれている長い器具のことである。医師は、女性の頭に巻かれたスカーフを触り、この構図と会話は、見るものに性的な誘惑を想起させるだろう。この絵が女性の家族の夫、父、兄に向けて訴えかけていること、そして女性から「夫」への言及が繰り返されていることから、女性を軸として男性産科医と女性の家族の男性メンバー、とりわけ夫との対立の構図が強調されている。

このような男性医師、特に男性産科医に対する道徳的な危惧はしばしばなされていた。特に女性を無意識に陥らせることができる麻酔の使用は、今でいう女性へのセクシャルハラスメントへの連想を働かせた。実際に、麻酔を使用した暴行事件（あるいは未遂）をめぐっては様々な事件が起きた。1857年に出版されたある医療冊子は、男性産科医が「かわいい顔をした女性を襲った」事件を引用し、「このように妻が屈辱を与えられているのをみすみすみ見逃す夫がいるだろうか」と、男性医師への注意喚起を促している。¹⁶ このように、潜在的にあった夫と男性産科医の対立は、男性産科医の威厳拡大のための主張とそれに伴う麻酔の使用によって、さらに深まっていったといえるだろう。

3. クロロフォルムを使った夫たち

クロロフォルムを用いた無痛分娩は、それまで痛みに苦しんできた多くのヴィクトリア朝の人々によって歓迎された。その多くは出産で苦しみを味わった女性であったが、妻のそれまでの出産での苦痛を間近で見て、精神的な苦悩を経験した夫たちも多く含まれていた。

その中に Charles Dickens もいた。Dickens と妻 Catherine (Kate) は 1836 年 4 月に結婚し、1837 年から 1850 年にかけて 9 人の子供をもうけた。そのうち最後の 2 回、1849 年と 1850 年の出産においてクロロフォルムを使用したことがわかっている。それまでも Kate の出産に義母らとともに立会い、妻の痛み、苦しみを共有していた Dickens は、クロロフォルムによる無痛分娩のニュースを聞きつけると自らもクロロフォルムについてリサーチを進め、クロロフォルムを使用する医師と連絡を取り付けた。その甲斐あって Kate はクロロフォルムでの無痛分娩を経験したが、Dickens は数名の知人に喜びを込め

てその様子を手紙に記している。知人の William Charles Macready には、クロロフォルム使用を以下のように伝えている。

I am happy to report that Kate is as well as it is possible to be. Her confinement was almost as bad a one as its predecessor, but Chloroform did wonders, and she knew nothing of it. (Tillotson et al., vol. 5: 486–7)

また、クロロフォルムによる無痛分娩の様子が、そこまでに至る様子とともに記されている。

Kate is wonderfully well ... Foreseeing the possibility of such repetition of last time, I had made myself thoroughly acquainted in Edinburgh with the facts of chloroform — in contradistinction to the talk about it — and had insisted on the attendance of a gentleman from Bartholomew's Hospital, who administers it in the operations there, and has given it four or five thousand times. I had also promised her that she should have it. The doctors were dead against it, but I stood my ground, and (thank God) triumphantly. It spared her all pain (she had no sensation, but of a great display of sky-rockets) and saved the child all mutilation. It enabled the doctors to do, as they afterwards very readily said, in ten minutes, what might otherwise have taken them an hour and a half; the shock to her nervous system was reduced to nothing; and she was, to all intents and purposes, well, next day. Administered by someone who has nothing else to do, who knows its symptoms thoroughly, who keeps his hand upon the pulse, and his eyes upon the face, and uses nothing but a handkerchief, and that lightly, I am convinced that it is as safe in its administration, as it is miraculous and merciful in its effects. This Edinburgh Professors assured me, and certainly our experience thoroughly confirms them. (Tillotson et al., vol. 5: 486–7)

複数の医師たちがクロロフォルムの使用に断固反対したにも関わらず、Dickens はエディンバラでクロロフォルムの知識を身に着け、Bartholomew's

Hospital の医師に立会いを依頼した。¹⁷ この手紙の内容からは、妻よりもむしろ Dickens 自身がクロロフォルムを使用したいという希望を強く持っており、積極的に関与した様子がうかがえる。

興味深いのは、Dickens のクロロフォルムへの興味が個人的な体験に留まらなかった点である。Dickens は彼自身が 1851 年から 1859 年にかけて編集者を務めていた雑誌 *Household Words* において、3 編のクロロフォルムに関する記事を掲載した。¹⁸ それらの記事は医学の知識を十分に持った著者によって書かれており、当時の Dickens の知名度から見ても、これらの記事はクロロフォルムの名をより広い人々に知らしめることに貢献したといえるだろう。

また、進化論で知られる Charles Darwin もクロロフォルムによる無痛分娩という新時代の幕開けを心から歓迎したひとりだった。1839 年にいとこである Emma と結婚した Darwin は、10 人の子供に恵まれた。そのうち Emma は少なくとも 2 回の出産においてクロロフォルムによる無痛分娩を経験した。1850 年と 1856 年のことである。Emma 自身の手による出産の記録は残されていないが、Dickens の例と同様、Darwin の残した手紙からは彼女の出産時の様子がうかがえる。

Darwin は予めから痛みに敏感に反応する性格だったようだ。Darwin は 1820 年代にエディンバラでの 2 件の外科手術を見学したが、あまりの恐怖にすべてが終わる前にその場から飛び出した。そしてその心境について自伝で「この 2 つの例はほんとうに長年自分を苦しめた」(C. Darwin and F. Darwin 12) と振り返っている。¹⁹

このような経験があったからだろうか、Darwin は Emma の出産の苦しみを取り除くために積極的に関わった。1850 年 1 月に Emma が第 4 子を出産した際の様子をいこの W.E. Fox への手紙の中でこう記している。

The day before yesterday Emma was confined of a little Boy. Her pains came on so rapidly & severe, that I could not withstand her entreaties for Chloroform & administered it myself which was nervous work not knowing from eye-sight anything about it or of midwifery. The Doctor got here only 10 minutes before the Birth — I thought at the time I was only soothing the

pains — but, it seems, she remembers nothing from the first pain till she heard that the child was born — Is this not grand? (Burkhardt and Smith, vol. 4: 302–3)

ここで、Darwin は医師が出産のわずか 10 分前になるまで到着しなかったため、クロロフォルムを自ら投与したと述べている。また、Darwin はこの時の経験に喜びを隠せず、同じような内容の手紙を友人の Henslow へも送っている。²⁰ また、1853 年にダーウィンに第 7 子が誕生した際にも、知人の J.D. Hooker にも同じような内容の手紙を送り、医師の到着前に自らクロロフォルムの投与を行ったことを誇らしげに書いた上にクロロフォルムの素晴らしさを説いた。さらに、翌年に Hooker の妻が出産した際には、クロロフォルムを使ったかどうかについて尋ねる手紙を送り、Hooker からはクロロフォルムを使用し、良い効果が得られた旨、返事を受け取っている。²¹

男性産科医と夫は、一見すると、出産の場で「クロロフォルムによる無痛分娩の実現」という共通のゴールへ向けて尽力していたかのように見えるが、両者は必ずしも共通の目的を持っていたとは言えないだろう。夫たちは、Dickens や Darwin の例に見られるように、妻の苦痛に共感し、あるいは痛み嫌悪を感じ、それを取り除くためにクロロフォルムの使用を選んだ。しかし、産科医は自らの利便性のためにクロロフォルムを好んだものもある。Simpson は、クロロフォルムを使用した手術について「手術中の彼女の扱いやすさは完璧だった」と述べた。また、19 世紀後半においてロンドンで産科医として活躍した産科医 Robert Barnes も、「クロロフォルムは、2 つの目的を達成するために使用される。1 つ目は患者の痛みを取り除くこと。そして 2 つ目は、手術をするものにとって、手術をより容易にすることだ」(209) と述べ、クロロフォルムによって患者を無意識に陥らせることで、患者が扱いやすくなる利点について言及している。²²

クロロフォルムが夫の関与をさらに深くしたということには理由がある。クロロフォルムは、それ以前の吸引麻醉エーテルと比べるとその利便性から人気が高まったといえる。エーテルが、特別な吸引器の使用を必要としたのに対し、クロロフォルムは液体化したものをハンカチに数滴垂らして顔に近づけてその気化した成分を吸わせることで簡単に使用できた。そのため実際

に医師でなくても予備知識さえあれば比較的簡単・安全に麻酔をかけることができたのである。そうした特性も、出産の場に、専門家である産科医と非専門家である夫との軋轢を生む要素となったのではないかと推測できる。

夫たちの情報共有という点においても、クロロフォルムの使用は新たな情報の流れを生み出した。女性同士のつながりは依然として存在していたものの、クロロフォルムという新しい医療技術をめぐっては夫同士の連携という新たな枠組みによって情報が共有・伝達され始めたのである。これはそれまでの時代に、出産にまつわる慣習が女性同士のつながりの中で伝授されてきた事実とは対照的である。いわば、女性から女性（助産婦、経産婦の知り合い、母から娘へ）の情報伝達が垂直的 (vertical) なものだったのに比べ、新たに夫同士、男から男へと伝えられる水平的 (horizontal) なネットワークが出現したといえるだろう。

4. 結 論

以上の分析より、19 世紀における夫の立会い出産はその時代に特有の複合的な意味を持っていたことが明らかになった。まず、1830 年代より顕著になる夫の立会い出産の増加は、ちょうど同時期に産科医が自分たちの社会的・職業的立場をより強固にするために奔走し始めた時期と重なることだ。その時点で夫の立会い出産の全体数が増えたかどうかはともかくとして、出産という場において権力を拡大しようとした産科医にとっては、夫は好ましくない存在であり、そのことが出産の場での産科医と夫の対立を浮き彫りにした。そして、その対立はクロロフォルムによる無痛分娩という新しい傾向によってさらに強調された。クロロフォルムの使用において、男性産科医は、自らの医師としての領域拡大、利便性の追求を求めたのに対し、夫は、男性産科医の、出産という私的な空間への進出に対応して妻に対する「権利」を主張しようとする、そのようなポリティクスが働いていたといえるだろう。

注

本稿は 2010 年にロンドン大学に提出した M.Phil 論文、“‘Pain is Evil’; ‘Pain is Natural’: Reactions to Pain in Childbirth and the Use of Obstetric Anaesthesia in Britain, 1847–1900” の一部を改変、発展させたものである。なお、この論文の執筆にあたっては、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校 Penelope Corfield 教授に有益な助言

をいただいた。

Notes

1. Obstetrical Society が設立されたのは、アイルランド 1838 年、スコットランド 1839 年のことだった。ロンドンでは 1825 年に一旦創設されたものの、大きな実績のないまま短命で自然消滅し、1858 年に再結成された。
2. 出産に関わる職業間でのジェンダー間（女性助産婦と男性助産師・男性産科医）の長きにわたるライバル関係については、Jean Donnison, *Midwives and Medical Men: A History of Inter-Professional Rivalries Women's Rights* (London: Heinemann, 1977) を参照のこと。
3. Jill Suitor は、19 世紀アメリカでの夫の立会いの事例を、医師によるアドバイス本での扱いを元に分析したが³、個人のケース、また、麻酔を使用した例については言及していない。Jill Suitor, "Husbands' Participation in Childbirth: A Nineteenth-Century Phenomenon." *Journal of Family History* 6 (1981): 278–93.
4. 夫の立会いが³ 1830 年代に増加したことは次の 3 つの研究書、論文で触れている。Suitor 283; John Tosh, *A Man's Place, Masculinity and the Middle-class Home in Victorian England* (New Haven: Yale UP, 1999) 82; Patricia Jalland, *Women, Marriage and Politics, 1860–1914* (Oxford: Clarendon, 1986) 145.
5. Charles Ansell は 1874 年に中・上流階級を Clergy, Legal, Medical, General (aristocracy, merchants, bankers, manufacturers, その他) に分類した。死産を含む平均出産数は、Clergyman で 5.36 人、Legal profession で 5.32 人、Medical profession で 4.96 人、そして General が³ 5.50 人だった。Charles Ansell, *On the Rate of Maternity at Early Periods of Life, the Age of Marriage, the Number of Children to a Marriage, the Length of Generation, and Other Statistics of Families in the Upper and Professional Classes* (London, 1874) 52.
6. Queen Victoria の出産時の医師の様子は以下を参照のこと。Stephanie J. Snow, *Blessed Days of Anaesthesia: How Anaesthesia Changed the World* (Oxford: Oxford UP, 2008) 82.
7. Annmarie Adams, *Architecture in the Family Way: Doctors, Houses, and Women, 1870–1900* (London: McGill-Queen's UP, 1996) 118.
8. Locock のケースについては Michael R.D. Foot and Henry G.G. Matthew, eds, *The Gladstone Diaries*, vol. 3 (Oxford, 1974) 32–3. を参照。Charles Locock (1799–1875) は当時すでに著名な産科医で、Queen Victoria のすべての出産に立ち会い、Gladstone 夫人など上流階級の出産を多く手掛けた。
9. 19 世紀後半においては、産科医が³ 出産の瞬間に間に合わないケースがよく見られた。場所の移動に時間がかかったうえ、経産婦が多かったことも関係しているだろう。Simpson の記録によれば、1848–49 年エディンバラにおいては、8.6% のケースで Simpson の到着前に出産が終わっていたという。Royal College of Physicians Edinburgh Archive 所蔵の *Abstract of the Proceedings of the Obstetric Society of Edinburgh for 1848–9* (Edinburgh, 1850) より。

10. Royal College of Surgeons Edinburgh Archive には、Simpson がやり取りした書簡が残っており、何人かの上流階級の女性からの問い合わせの手紙には Simpson が手紙とともに送ったパンフレットへのお礼が書かれていた。
11. Royal College of Surgeons Edinburgh Archive 所蔵の James Young Simpson Papers, Ms. 621: Letter to J.Y. Simpson from Lord John Russell, 7 Oct. 1850. この時の診察内容については不明。
12. 例えば 1837 年より重版を経てベストセラーになった Thomas Bull のアドバイス本が有名である。Thomas Bull, *Hints to Mothers for the Management of Health during the Period of Pregnancy, and in the Lying-in Room, with an Exposure of Errors in Connection with those Subjects, etc.*, 8th ed. (London, 1853) 134.
13. ‘Country Doctor’, “Husbands in Bed-Rooms during Parturition”, *Lancet* (11 Dec. 1841): 390–1.
14. ‘W.K.’, “Husbands in Lying-in Rooms”, *Lancet* (15 Jan. 1842): 551.
15. “Morality of Modern Medicine-Mongers.” Lithograph. London, 1852. Wellcome Images, L0001224. Wellcome Lib., London.
16. A Student [John Browne], *The Accoucheur: A Letter to the Rev. Mr. Tattershall of Liverpool on the Evil of Man-Midwifery* (London, 1857) 39–48.
17. この医師は先行研究によって、当時ロンドンでのクロロフォルム使用の第一人者を自負していた Dr Protheroe Smith であることがわかっている。
18. *Household Words* に掲載された Chloroform に関する記事は次の 3 篇。Percival Leigh, “Some Account of Chloroform” (10 May 1851)、Henry Morley, “Chloroform” (23 April 1853)、William Overland Priestley, “Chloroform” (12 Feb. 1859)。各著者とも医学を学んだ経験があった。
19. Darwin は 1825 年 10 月より 2 年間エディンバラで医学を学んだ。
20. J.S. Henslow への書簡 (17 Jan 1850) は Frederick Burkhardt and Sydney Smith, eds., *The Correspondence of Charles Darwin*, vol. 4 (Cambridge, 1985) 303 を参照。
21. J.D. Hooker 宛の書簡 (3 Feb 1853)、J.S. Henslow からの返信 (17 Jan 1854) はそれぞれ Burkhardt and Smith eds, *Correspondence of Charles Darwin*, vol.4: 311; vol. 5: 199 を参照。
22. Simpson のここでの言及については Helen King, *Midwifery, Obstetrics and the Rise of Gynaecology: The Uses of a Sixteenth-Century Compendium* (Aldershot: Ashgate, 2007) 189 を参照。Robert Barnes は 1860 年代には Obstetrical Society of London の会長を務めるなどロンドンの産科医の中でリーダー的存在だった。ただし、自然分娩でのクロロフォルムの使用には反対的立場をとった。

Works Cited

- Barnes, Robert. *Lectures on Obstetric Operations, Including the Treatment of Haemorrhage, and a Guide to the Management of Difficult Labour*. London, 1871.
- Branca, Patricia. *Silent Sisterhood: Middle-Class Women in the Victorian Home*. London:

- Croom Helm, 1975.
- Burkhardt, Frederick and Sydney Smith, eds. *The Correspondence of Charles Darwin*. 18 vols. Cambridge: Cambridge UP, 1985–2010.
- Cust, Maria. [Diary]. Oriental and India Office Collection. Mss. Eur. A. 118. British Lib., London.
- Darwin, Charles and Francis Darwin ed., *Selected Letters on Evolution and Origin of Species: With an Autobiographical Chapter*. New York: Dover, 1958.
- Fulford, Roger, ed. *Dearest Child: Letters between Queen Victoria and the Princess Royal*. London: Evans Bros, 1964.
- Lewis, Judith. *In the Family Way: Childbearing in the British Aristocracy, 1760–1860*. New Brunswick: Rutgers UP, 1986.
- MacCarthy, Desmond and Mary Agatha Russell, eds. *Lady John Russell: A Memoir; with Selections from her Diaries and Correspondence*. 3rd ed. London: Longmans, 1926.
- Tillotson, Katherine, Madeline House, and Graham Storey, eds. *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Oxford : Clarendon, 1965–2002.
- Tosh, John. *A Man's Place, Masculinity and the Middle-class Home in Victorian England*. New Haven: Yale UP, 1999.